

名 誉 会 員 追 悼



故 名誉会員 岸田壽夫 氏

社団法人日本鉄鋼協会名誉会員、元大同特殊鋼(株)社長、岸田壽夫氏は、平成19年12月8日、ご逝去されました。享年86。ご逝去の報に接し謹んで哀悼の辞を申し上げます。

氏は、昭和20年9月東京帝国大学第二工学部冶金学科卒業、昭和21年12月大同製鋼株式会社(現大同特殊鋼株式会社)に入社し、取締役渋川工場長、常務取締役知多工場長、専務取締役、取締役副社長を経て、昭和63年代表取締役社長に就任した後、同社相談役等を務められました。

氏は、大同製鋼に入社以来、一貫して高品質量産特殊鋼の生産技術、特に製鋼技術の進歩発展に先駆的役割を果たし、業界の発展に貢献されました。知多工場在籍時には、連続 casting が普及していなかった昭和30年代に、鋼塊の大型化を図り、スロットッドモールド、発熱押棒等を業界に先駆けて導入し、鋼塊品質・歩留の大幅な改善を達成されました。溶解・精錬工程においては、当時最大級の70トン電気炉の改善に取り組み、炉体、炉蓋の水冷システム等の開発により超高電力操業を可能にし、さらに昭和50年代初めのオイルショック時には「酸素富化・炭粉吹き込み操業」を完成させました。これらの諸技術は、電気炉の効率向上、省エネルギーに多大な貢献を果たしました。また、炉外精錬法としてのRH法の有効性に早くから着目し、昭和40年には特殊鋼用としては国内初の大容量RH真空脱ガス法を導入し、特殊鋼の高品質化に努められました。また、氏は、当時困難とされていた「特殊鋼の連続 casting 化」に取り組み、昭和47年に渋川工場長として小型連続 casting 設備を導入し、特殊鋼の連続 casting 化を目指した技術開発を行いました。その成果をもとに、昭和55年には本邦初の特殊鋼専用ブルーム連続 casting 機を知多工場に設置し、RH脱ガス法と組み合わせて特殊鋼の連続 casting 化に成功しました。更に、昭和57年には取鍋精錬法(LF)を併設し、電気炉で行っていた還元精錬をLFで行うとともに、精度の高い温度・成分の調整を可能にしました。連続 casting に加えて、こうした合理的な精錬機能の分業化による「複合炉外精錬法」の確立により完成したAF-LF-RH-CCプロセスは、現在国内はもとより世界中で高品質量産特殊鋼の製鋼プロセスとして広く活用されております。さらに、平成4年には知多工場に丸断面一完全垂直型連続 casting 機を導入し、斬新な鋳片軽圧下技術等を採用して、従来の連続 casting 機では、 casting が困難であった高級ステンレス鋼、工具鋼の連続 casting 化に成功し、品質改善および歩留改善を実現しました。

氏は、日本の特殊鋼製造技術の発展は、戦後の復興期・発展期に先進的な特殊鋼生産技術を有していた欧米諸国からの技術導入のお陰であるということをご常々口にしておりました。そのため、海外への技術協力に非常に高い関心があり、日本で開発された技術を幅広く、諸外国メーカーに普及することに努められました。

以上の業績により、本会から昭和46年に渡辺義介記念賞、56年に渡辺三郎賞、平成2年に製鉄功労賞を受賞され、本会の副会長、理事、特殊鋼部会長、評議員を歴任し、平成10年には名誉会員に推挙されました。また、昭和63年には藍綬褒章、平成5年には勲二等瑞宝章を授与されています。

氏は、後進の指導育成にも心血を注ぎ、印象に残る多くの言葉を若い人たちに遺されました。そのひとつをここにご紹介します。『今の特殊鋼業界は次の改革に向けての充電期間にあると思います。現状に至った歴史を知ることが、新たな方向性を見出す鍵だと考えます。今後を担う若いエンジニアの皆さんに期待することは、歴史を知り、現実を知り、現状を否定するチャレンジ精神を忘れないで欲しいということです』

氏が鉄鋼科学技術と本会の発展に尽くされた多大なご業績を偲び、会員一同、心からの哀悼の意を捧げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

平成19年12月

日本鉄鋼協会 会長 浅井 滋生